小論文　京都大学　経済学部（前期・論文Ⅱ）　1／2

＜総括＞

試験時間　120　分	総解答字数　1600 字以内

論文Ⅱの今年度の問題は、少し趣の異なった昨年度の出題形式を踏襲するのではなく、一昨年度まで続いてきた一般的な図表分析型の出題形式に復帰した。与えられた資料は５つの図表である。

全体のテーマは「日本人の食の変化」であり、イメージしやすく話題的には取っつきやすいだろう。

設問１～設問３はいずれも図表の読み取り分析と見解論述を求める点で共通し、設問主題も明確である。図表分析型の問題演習をしてきた者にとっては特に慌てる要素はなかっただろう。

難しい点があるとすれば、図表はシンプルだが情報量が多いことだ。全てを網羅しようとすると解答字数に収まりきれず破綻する。かといって恣意的に抽出すると資料全体を読み取ったことにならない。

設問数は昨年度と同じ３問となり、総解答字数は昨年より少ない 1600 字以内であった。

各設問での作業は一見、独立性が高く自己完結的であるとも思えるが、相互にある程度の関連性はある。まず、設問１で 1985 年以降 2013 年に至るまでの食の変化を読み取らせ、背後にあるバブル経済期からポストバブル期までの歴史を振り返らせ、また、設問２では家族そろっての夕食をする頻度と親子の会話時間の相関を読み取らせて、労働と生活の関係をイメージさせ、その上で、設問３で、世代ごとの食生活の特徴や変化を、とくに高齢者に焦点を当てて論じさせようとしているのである。

設問を一つ一つ着実に解いていく作業自体が、次の設問を解いていくための不可欠な学習となっている。まずは、設問の要求を正確に把握し、その要求に丁寧に対応していくように心がけたい。

＜課題文の分析＞

大問番号	論文Ⅱ
内　容 （主題）	日本人の食の変化
出　典 （作者）	総務省「家計調査」 厚生労働省「児童環境調査」（2001 年度以前）、「全国家庭児童調査」（2004 年度以降）
長短・ 難易等 前年比較	長短（短い・変化なし・[長い]）　難易（[易化]・変化なし・難化）

© 河合塾　2015 年

＜大問分析＞

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
Ⅱ	図表	一般教養的	設問１	分析・論述	400字以内	資料１（１世帯あたり年平均食費支出の推移（２人以上の世帯））から読み取れる事実を指摘し、考察する。 資料１について食料全体とその内訳（菓子類、調理食品、飲料、酒類、外食）の各金額と割合の推移を一通り読み取る必要がある。順番を考えて整理しないと、読み取り部分だけで、字数を浪費してしまうので注意を要する。 その上で、近年の経済社会の変化を視野に入れ食生活の変化の背景を整合的に分析したい。
			設問２	分析・論述	400字以内	資料２（「１週間のうち、家族そろって一緒に夕食をとる日数」）と資料３（「１週間のうち、家族そろって一緒に夕食をとる日数」ごとにみた「父、母と子供との会話時間（１週間あたり）」）をもとに、現代の子供の食の状況とその背景について論述する。 資料２について家族そろっての夕食日数の変化（減少）を読み取るのは比較的容易だが、資料３について日数変化と父子間の会話時間と、日数変化と母子間の会話時間とが異なる相関を示すことを読み間違えないようにしたい。 その上で、労働と生活の関係や子供をめぐる環境の変化を視野に入れ、背景を分析したい。
			設問３	分析・論述	800字以内	資料４（各食品についての2001年と2013年の世帯主年齢別（２人以上の世帯）の世帯単位の購入量の比較）と資料５（各食品についての2001年と2013年の世帯主年齢別（２人以上の世帯）の世帯単位の購入金額の比較）をもとに、世帯主年齢ごとの食生活の特徴・変化、特に高齢者の食生活の特徴・変化について述べる。 資料４・５は世代ごとに各品目の増減の割合を概算するなどして食生活の特徴・変化を読み取った上で、消費支出に関して若・壮・老年層の所得状況、ライフスタイルのあり方、各世代の特色や時代の志向などを視野に入れて、背景を分析したい。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」
※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」
※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

© 河合塾　2015年